

3) も も

(1) 防除法 (殺菌剤)

【注意】乳剤及び水和剤等で「150～3000」等と記載した 10a 当り散布液量（または希釈水量）は、作物の生育段階や散布作業等を考慮した目安である。農薬使用に当たっては、必ず農薬容器のラベルを確認し、使用方法に散布液量（または希釈水量）の記載がある場合は、その量を遵守すること。

病 害 虫 名	防除適期	防 除 方 法	備 考
黒 星 病	落葉期間 (11 月～3 月) 5 月中旬 ～7 月上旬	○ 剪定時に被害枝を剪除する。 ○ 次の薬剤いずれかを散布する。 イオウフロアブル サルファーズ トレノックスフロアブル ダコニール 1 0 0 0 デランフロアブル チオノックフロアブル ベルコート水和剤 ベルコートフロアブル アミド系剤 フルーツセイバー DMI 剤 アンビルフロアブル インダーフロアブル オーシャイン水和剤 オンリーワンフロアブル ストロビルリン系剤 アミスター 1 0 フロアブル ストロビードライフロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 ストロビルリン系・アミド系混合剤 ナリアWDG	○ 果実によく付着するように散布する。 ○ サルファーズ、イオウフロアブルは、高温時（28℃以上）には薬害のおそれがあるので使用しない。 ○ アミド系剤及びアミド系混合剤の使用は、合わせて年 2 回までとし、連用しない。 (耐性菌出現防止) ○ DMI 剤の使用は年 2 回以内とし、連用しない (耐性菌出現防止)。 ○ ストロビルリン系剤及びストロビルリン系混合剤の使用は、合わせて年 2 回までとし、連用しない。 (耐性菌出現防止)
縮 葉 病	発 病 前 (3 月中旬～下旬) 随 時	○ 次の薬剤を散布する。 キノンドー水和剤 4 0 オキシンドー水和剤 8 0 ドキリンフロアブル ○ 被害葉は、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。	○ 温暖無風の日を選び小枝の先まで十分にかかるように散布する。
せん孔細菌病	落葉期間 (11 月～3 月) 開花直前 落花後 ～5 月下旬 収 穫 後 随 時	○ 被害枝を剪除する。 ○ コサイド 3000 を散布する。 ○ 次の薬剤いずれかを散布する。 アグリマイシンー 1 0 0 デランフロアブル マイコシールド ○ 収穫後に次の薬剤いずれかを散布する。 4－1 2 式ボルドー液 I C ボルドー 4 1 2 コサイド 3000 ○ 園地に防風垣などを設ける。 ○ 適切な肥培管理を行って樹勢の回復を図る。	○ 落花直後から 10 日ごとに散布する。 ○ アグリマイシンー 1 0 0 とマイコシールドは連用を避ける。 ○ 収穫後のコサイド 3000 散布は、薬害軽減のため、炭酸カルシウム水和剤を加用して 9 月以降に散布する。
灰星病	落葉期間 (11 月～3 月) 6 月下旬 ～8 月下旬	○ 園地を清掃する。 ○ 被害枝を剪除する。 ○ 次の薬剤いずれかを散布する。 ダコニール 1 0 0 0 ダコレート水和剤 ダコレックス水和剤 トップジンM水和剤 アミド系剤 フルーツセイバー ベルコート水和剤 ベルコートフロアブル ベンレート水和剤 ロブラール水和剤 パスワード顆粒水和剤	○ 雨が多いと発病が増加するで、散布間隔を短縮する。 ○ 「すもも」などの被害果も伝染源となるので注意する。 ○ トップジンM水和剤、ベンレート水和剤、ロブラール水和剤は連用を避ける。 ○ アミド系剤及びアミド系混合剤の使用は、合わせて年 2 回までとし、連用しない。 (耐性菌出現防止)

病 害 虫 名	防除適期	防 除 方 法	備 考
灰星病 (続き)	6月下旬 ～8月下旬	○ 次の薬剤いずれかを散布する。 DMI 剤 アンビルフロアブル インダーフロアブル オーシャイン水和剤 オンリーワンフロアブル スコア顆粒水和剤 ストロビルリン系剤 アミスター10フロアブル ストロビードライフロアブル ファンタジスタ顆粒水和剤 ストロビルリン系・アミド系混合剤 ナリアWDG ○ 園内や集果所では、被害果を見つけ次第、集めて土中に埋める。	○ DMI 剤の使用は年2回以内とし、連用しない(耐性菌出現防止)。 ○ ストロビルリン系剤及びストロビルリン系混合剤の使用は、合わせて年2回までとし、連用しない。(耐性菌出現防止)
ホモブシス 腐敗病	落葉期間 (11月～3月) 6月下旬 ～8月上旬	○ 被害枝を剪除する。 ○ 次の薬剤いずれかを散布する。 ダコレート水和剤 ダコレックス水和剤 トップジンM水和剤 ストロビルリン系剤 ファンタジスタ顆粒水和剤 ストロビルリン系・アミド系混合剤 ナリアWDG ピーチガード水和剤 ベルコートフロアブル ベンレート水和剤	○ トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は、連用を避ける。(耐性菌出現防止) ○ ストロビルリン系剤及びストロビルリン系混合剤の使用は、合わせて年2回までとし、連用しない。(耐性菌出現防止) ○ アミド系剤及びアミド系混合剤の使用は、合わせて年2回までとし、連用しない。(耐性菌出現防止)